

---

# 涼宮ハルヒ二次創作「涼宮ハルヒの間違」

光之雷斗

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

涼宮ハルヒ二次創作「涼宮ハルヒの間違」

### 【Nコード】

N3917C

### 【作者名】

光之雷斗

### 【あらすじ】

涼宮ハルヒの世界　そう、アニメや漫画なんかの世界に憧れる人はいるだろう。彼ら双子、郷原ヒカルとアカネも想思う人間だった。しかし、本当にその世界へ言ってしまうとは。ハルヒシリズをシリアス目線から見直す二次創作作品、解禁！

## 涼宮ハルヒの間違（オリジナルストーリー）（前書き）

涼宮ハルヒシリーズの二次創作です。

涼宮ハルヒを知らない人、二次創作に不快感を覚える人、作者に個人的恨みのある人（笑）はご遠慮ください。

## 涼宮ハルヒの間違（オリジナルストーリー）

一組の男女が夕暮れの道を歩いている。

肩を並べて、何故か少年が少女の分まで鞆を持たされている。

「おいアカネ……あんまり走るな」

アカネと呼ばれた少女はその言葉を見無視するように遠くまで走り出していた。

「ほらヒカル！早くはやくー！」

二人とも制服姿、時刻から考えて高校生の帰宅中と言ったところだろう。

少女、名は郷原アカネ。

少年、名は郷原ヒカル。

肩を並べていると恋人にも見えるが、彼らは双子の兄妹である。

そして今現在、何を急いでいるかと言うと……。

「早くしないと特売間に合わないよー！」

学校から帰る途中にあるスーパーでタイムサービスがあるのだ。

それを目的に二人は急いでいるのである。

「だから走るな、」

その時、不意にヒカルの言葉が止まる。

そのまま足まで止まってしまふ彼を振り返って見ていたアカネは気づかなかつたのだらう。

目の前から来る、自動車に。

響くクラクション。走り出すヒカル。

振り返って驚き、その場に倒れこむアカネ。

「アカネ！」

叫んだ時には既に遅かった。

車のブレーキも間に合わない。

ヒカルとアカネの姿がヘッドライトに照らされて……

ドンッ！

最初に気がついたのはどちらだったか。

体に痛みを感じない。車がぶつかつた『音』は確かに聞いたのに。二人の意識がはつきりとしてくるにつれて、状況を理解しようとする思考が動き出す。

目の前は……水。それも深緑色に染まっている。

しかし体にまとわりつく訳ではない。目の前を流れている。

「なっなに！？」

声をあげたのはアカネ。叫び声のように大きく、しかし呟きのように小さな声で。

「俺達今立つてるのか？それとも寝てるのか？」

「浮い……て、る？」

声が響いてあたりに拡散される。

長い間此処にいたような気がして、それでも初めて来た気がする世界。

二人の感覚が麻痺してくる。

「水が流れてるんじゃない……俺達が『跳んで』るんだ」

世界が逆回転するように。

風が動きを止めるように。

光が消え去るかのように。

彼らの神経が、五感が、意識が、体が。

『跳んでいる』のだ。

彼らの足元から光が差し込んでくる。みると、そこでは事故で息絶える二人の姿。

「なっ……」

「やめてっ！」

アカネが怯えたように叫ぶ。頭を懸命に抑え、最後に  
「……消える」

とだけ呟いて意識を失う。  
ヒカルも目眩を感じて、静かに瞼を伏せていった。

「んっ……」

声を絞り出すヒカル。背中にアスファルトの冷たい感覚がある。  
体をゆっくりと起こし、自分が地面に倒れていた事と横に眠るアカネを確認する。

世界を『跳ぶ』感覚……ヒカルは疑問に思いながらアカネを起こす。

「おい。起きろ、アカネ……おい」

体をゆすると、アカネはゆっくりと瞳を開いた。そしてしばらく放心状態になる。

「……」

右を見て、左を見て、最後にヒカルの顔を見るアカネ。

「……誰？」

ヒカルは耳を疑った。

「誰……ですか？」

少女の言葉がヒカルの胸に突き刺さるように響く。少女の怯えたような顔。

ヒカルは深呼吸する。落ち着こうとする行動。

「覚えてないのか？何か少しでも……」

希望を信じて。

しかし少女は否定を意味するように首を横に振る。

「ごめんなさい、何も思い出せないの……」

「嘘、だろ！？なあ……！なあ！」

彼女の体を何度も揺さぶりながら、ヒカルの心から希望が消える。  
どちらにも罪はない、ヒカルは行動の無意味さに気がついてうつむいた。

「ごめん……。お前は郷原アカネ、俺は双子の兄の郷原ヒカルだ」

「さとはら……あかね？」

自らの名を認識するように復唱する少女。

その時、ふと声をかける少年がいた。

「おや？」

それはとても落ち着いた声だった。

声をかけてきた少年はヒカルとアカネの目の前にいた。

腕を組み、二人の姿を確認するように見つめる。それに対するヒカルも内心驚いていた。

目の前にいる少年の正体に、そして同時に彼が絶対にいないと言う否定感が心の中で交錯する。

「古泉……か？」

「僕の事をしっているのですか？何処かでお会いしたでしょうか？」  
その口調、声、そして姿。

それはヒカルの知る『アニメの中にいるはずの古泉の姿』だった。  
アカネは無言で古泉一樹の方を向き、首をかしげる。

どちらにしてもアカネは向こうでの思い出を失っている。ならば彼の事も覚えていないだろう。

だが。

「そんな、嘘だろ？だって古泉一樹はアニメの中の……」

「一体何の事でしょうか？失礼ですが僕はあなたと会った覚えがないのですが」

ヒカルは一か八かの賭けに出る。

その発言に全てを、託して。

「お前は超能力者か？」

何も知らない人が聞いたら、さぞ意味の分からない言葉だっただろう。

しかし古泉一樹は明らかに、その顔をゆがませた。

「どういう事です？なぜそれを……」

「俺とこいつが異世界人だって言ったら、笑うか？」

笑顔で余裕の形相をしていた古泉一樹は、超能力者発言から明ら

かに笑顔を失っている。

つまり、彼はヒカルの知る古泉という事だ。

ヒカルは確信を得てきた……ここは。

「なあ古泉、どっかで話さないか？」

「ええ、こちらとしても色々知りたい事もありますしね」

アカネを連れて、ヒカルが歩き出す。古泉もそれについていく。しばらく歩くと並木道が見えてきた。そのベンチに腰掛ける。

「何処から話すか」

「……まずはそちらの正体を聞きましょうか」

余裕の笑みを作り直した古泉が問う。

ヒカル自身も何処から説明すべきか悩みつつ喋りだす。

「先ほども言ったとおり異世界人だ。ただ、俺自身も分かりかねているけどな」

ヒカルは語り始める。

自分達が車に轢かれかけた事、おかしな『跳ぶ』感覚になった事、気がついたらこの世界にいた事。アカネが記憶を失った事やハルヒの小説や漫画、アニメの話もした。

とても長い長い説明だったが、アニメの話を一通り終えた所でヒカルは間を置く。

「にわかに信じがたい事です。これも涼宮さんが望んだ事なのかあるいは……」

「それが分からないから俺達も困ってるんだ。唯一同じ世界の記憶を持ってたアカネはこうなっちまったし」

その言葉に対してアカネは

「ごめんなさい……本当に……」

と謝辞を告げる。ヒカルは急いで訂正する。

「別にお前は悪くないって！」

古泉はしばらく考える動作をした後に喋りだす。

「本当にあなたの記憶が正しいのでしょうか？」

あくまで仮説ですが、と言葉をつけた上で続ける。



「もしかしたら、あなたがたは今此処で何らかの形で誕生したのかもしれない。あなたの記憶が間違っているかもしれない、という仮説です」

ヒカルはポカンと口を開けたまま閉じれない。

「お前……マジで言ってるのか？」

「とにかくです。あなた方も困っているでしょうし、機関に相談してあなた方に家を提供しましょう。住むところもないようですし」

住むところ。

「全然考えてなかった……俺達家なしなのか」

「私自身はまだ、信じれないけれど」

古泉がケータイで電話をかけている。

しばらくするとタクシーが到着して前に古泉、後ろにヒカルとアカネが座る。

すぐにタクシーはエンジンを噴かして走り出す。

「アカネ、何も覚えてないのか？どんな些細な事でもいいんだけどさ」

考える仕草をするアカネ。そのまましばらく静寂が過ぎる。

そして、ふと顔をあげる。

「そういえば、誰かに向かって叫んでいた気がする。『行かないで……』？」

「どういう事だ？俺に、じゃないな……」

心当たりを探すヒカル。数分の時間が過ぎる。

そこへ古泉が顔を出す。

「思考に浸っている所申し訳ないですが、こちらです」

ドアを開いて、外に出る。生暖かい空気が体にまとわりつく。

普通の一軒家。どちらかと言うと大きめ。

「……マジで？」

「えらくマジです」

ヒカルは目を丸くする。アカネも驚いている。

古泉はタクシーの後ろのトランクから紙袋を二つ取り出す。

それを二人に一つずつ渡すと

「お二人が異世界人というのでしたら、それは必ず必要になります。つまりは、北高の制服です」

ヒカルは呆然とした。

ヒカルは簡単に状況を思い出す。

まず、自分達が交通事故に遭いかけた事、そのまま『跳んだ』事。こちらの世界でアカネの記憶がなくなった事、古泉に出会った事。そして此処、機関が用意してくれた広めの一軒家。

「つまるところ」

この世界に来たからには何かしなければならぬのだ。

ヒカルとアカネがこの世界に来たのが、涼宮ハルヒの望む事ならば。

「おはよう、アカネ」

ドタバタ過ぎる昨日の出来事を、眠るという行為で落ち着かせた二人。

「おはようございます」

「一応兄妹なんだから、口調はやわらせてくれよ」

一日眠ったおかげで、二人ともに少し落ち着いたようだった。

既に制服姿であった二人はリビングに集まり、適当に朝食を取って家を出る。

目の前でタクシーと古泉が待っていた。

「お待ちしましたよ」

頷いて乗り込むヒカルとアカネ。

「あなた方は長門さんと同じクラスです。……分かりますよね？」

「一年六組だな」

古泉はその言葉で改めて確認したようで、ヒカルが異世界人である事を理解する。

アカネはその『長門』という人物を知らないため、終始疑問符し

かでない。

しばらくの後北高に到着。今日はタクシーだが明日以降はこの坂はこたえそうだ。

「文芸部に来てください。意味はお分かりの通りだと思いますけれど」

「分かった。SOS団に行けばいいんだな」

古泉はそのまま自分のクラスへと歩いていき、ヒカルとアカネは職員室へと向かう。

担任になる先生に連れられて一年六組へ。

チャイムの後、先生の紹介が入って自己紹介を行う。

「始めまして、郷原ヒカルです」

「郷原アカネです」

拍手の音と共に先生が指定した席へ。ヒカルの前の席には……。

「……異界振動移動能力」

「長門さん……か？」

ヒカルはそこでこの世界に来た事を改めて理解した。

その雰囲気、髪の色、そしてどこかにある威圧感。

長門有希、だ。

疑問視するアカネ。ちなみに席はヒカルの横だ。

「誰？」

「文芸部の部長、でいいか」

長門は小さく頷く。

アカネは何も知らないので、あまり大っぴらに説明できない。

長門有希は二人を順番に見て黙り込む。

何かを考えているのだろう、もしくは情報統合思念体とやらに報告してるのかもしれない。

しばらくの後言葉を発する。

「私が過去にこの時代の私と同期した際、記憶の中にはいなかった」  
ヒカルは頷く。

「何者？」

説明のしようもない、疑問だった。

ヒカルは無言を押し通した。

長門有希が疑問を投げかけてくる事自体が相当貴重な事なのだが、ヒカルは気づいていない。

無言のまま、時間だけが過ぎていく。

休み時間などで質問攻めにあつたヒカルとアカネの元に放課後、一人の少女が歩いてきた。

黄色いリボンとカチューシャ、気の強そうな瞳と全体的にバランスのよい体つき。

「有希！」

最初は長門に声をかけていた。

「今日来た転校生ってどれ？」

長門はヒカルの方を向く。しばらく凝視してアカネの方も見た。その態度に満足したのか、そいつはヒカルとアカネの間に立つと顔を見比べる。

「なるほどねえ。こんな時期に転校してくる奴なんて早々いないわ。古泉君はともかく、今度こそ謎の転校生ね！」

「……あの、誰ですか？」

アカネが質問した。

ヒカルだったら口を滑らせているところだったので、アカネで大正解である。

そいつはにんまりと笑顔になると

「あたしの名前は涼宮ハルヒ！世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団、略してSOS団の団長よ」

意味不明と言った顔でアカネは困惑する。

「で、その何とか団の団長さんが俺達に何のようだ？」

ヒカルもしらばつくれる気になつたらしい。

しかしいきなりその言葉を見殺した少女、涼宮ハルヒは強引に二

人の手を引いて歩き出す。

「さあ謎の転校生達！我が団でその謎をじっくり暴露するといいわ  
！」

SOS団の部室へと向かう。

SOS団部室は、長門有希しか部員のいなかった文芸部を則るこ  
とで存在している。

学校には非公認であり、その存在は完全に邪魔もの扱いだ。

「みんなー、お待たせ！」

涼宮ハルヒは何がそんなに楽しいのか、扉を思い切り蹴り破って  
部室に入っていく。

ヒカルとアカネもそれにしたがって部室に入るしかない。と言う  
よりは引つ張られてるのだが。

「この二人が、謎の転校生二人組よ！」

謎だと思っているのはハルヒだけだが、それはともかくとして。

「ちよい待て。またお前はそうやって何処かの狩人のごとく一般人  
を拉致してくるのか」

「前にも言っただけけど？これは任意同行よ」

ツツコミをやたらに長い言い回しで言っているのは、間違いなく  
物語の本当の語り手であった男、キヨンである。

あいにく本編では名前が出ていなかった。

「で、あんた達。素直に正体を白状しなさい」

いつの間にか部室にいる長門有希と一人チエスに励む古泉一樹を  
確認したヒカルは、まだ見てなかった最後の存在に目を向ける。

今現在メイド服でポカンとしているその少女は、誰も間違える事  
のない美しき天使。朝比奈みくるである。

「部活なんて何でもいいんだが……此処は何する部活だ？」

知っているものの、一応聞いておくヒカル。

「宇宙人や未来人なんかを探し出して、一緒に遊ぶ事が目的よ」

「え？」

アカネは何も知らないのそこで思わず声を出して疑問化する。

「新しい仲間を加えて、SOS団もますます盛り上がってきたわ！」  
涼宮ハルヒは、二人を連れてきた時点で満足したらしい。

「みんなで二人にSOS団について教えておきなさい！あたしは準備があるから、じゃあね！」

一時の竜巻のように消え去っていったハルヒを見送りながら、ヒカルは口元が緩む。

彼にとって、彼女らが目の前にいるだけで夢のような光景なのだ。「さてと、とりあえずお前らの正体を聞いておかないと俺的にも困るんだが。ちなみに俺の名前は、」

「よろしく。キョン」

ヒカルが言った途端に怪訝な顔をするキョン。何で知ってるんだとそういう事に違いないだろう。

次々に名を告げていくヒカル。

「同じクラスの宇宙人長門さんに、SOS団マスコット未来人の朝比奈さん、そして昨日は色々ありがとな、古泉」

長門は何も言わず読書を続けており、みくるは目と口とをまん丸にしたまま停止、古泉はいえいえと微笑んでいる。

ヒカルが隣を見ると、何も知らないアカネがはてなを浮かべていた。

「アカネにも込みで改めて説明しておくよ」

自分達の元の世界の話やそこから起きた出来事、ハルヒ小説の話を簡略化しながら説明していくヒカル。

その間キョンはずっとヒカルを変な目で睨み続けていた。

説明を終えると、長門は本を閉じる。これはSOS団にとって終わりを告げる音だ。

「また俺の不安要素だけが増えたわけか」

キョンは溜息つきで肩をがっくりと落とす。

「しかし、僕もイマイチ信用は出来てないのですが」

「じゃあちよつと予言してやろうか？」

ヒカルがそつと口を開く。

「だっ駄目です！」

ヒカルよりも先に叫んだのはメイド姿の美少女、朝比奈みくるだった。

金切り声で、しかも全力で叫んだみくるの姿をしばらく無言で見つめていた一同。

「あ、朝比奈さん……？」

キョンが凝視しながら呟く。自分でも驚いたようで朝比奈さんは顔を紅潮させた。

「いえ、あの……でも！えっと……」

しどろもどろで慌てるみくるの姿を見ながら、ヒカルは謝る。

「すいませんでした、やはり未来の事は俺なんかが口にすべきではないですね」

そのまま部室を出た一同は、帰り道を歩む。

アカネは既にみくると仲良く会話を始め、記憶の欠片を埋めようとしていた。

その姿が 無理に全力でがんばっているように見えて悲しくもなるが。

ヒカルも古泉と会話しながらキョンへと話を振り、キョンは未だ疑いながら返事をしていく。

何気ない会話をしながらふとヒカルは思い出す。

「明日は七夕か」

その呟きは風へとかき消されていき、ふっと疑問がよぎる。

原作にいないヒカルとアカネ。

彼らがいることで歴史が変動したりするとどうする……？

「俺は、どうするべきなんだろうな」

「どうした？」

キョンが質問した声をBGMに。

そっと、物語は幕をあげたのだった。

涼宮ハルヒの間違 笹の葉ラプソディ編へ続く

## 涼宮ハルヒの間違（オリジナルストーリー）（後書き）

ハルヒ作品が大好きなもので、作者と共通の趣味があるのでしたら盛り上がりたいところですね（笑）。



## 笹の葉ラプソディ（前書き）

### 参考

小説「涼宮ハルヒの退屈」収録同名短編より

## 笹の葉ラプソディ

「結局のところだ」

不意に呟いたヒカルは、自分の目の前にノートを開く。

お茶を入れながらそれを見ているみると対面で微笑む古泉、本を読む長門。

古泉の横にはアカネが座り、ヒカルのノートを覗き込む。

「授業中もずっとこれで……私もヒカルが何してるのかわかんないし」

違和感をなくすためにヒカルと呼ぶ事を義務付けられたアカネだが、まさに違和感なしだ。

アカネ自身も双子ならそう呼ぶべきだと納得している。

で、結局のところヒカルが何をやっているのかと言うと。

「小説世界とアニメ世界、さらに漫画世界とこの世界は実質別世界なわけだ」

小説、アニメ、漫画と現実世界の文字を線で繋いでいく。

「この平行世界を跳ぶことが出来る、それが異世界人である証拠ですね」

一人でチェスの駒を動かしていた古泉が解説する。頷くヒカル。

と、ゆつくりと扉を開いてキヨンが入ってきた。

「あ。こんにちは」

みくるはお茶を用意してヒカルの横の席、つまりキヨンの席に置いた。

「やあ、調子はどうですか？」

古泉が微笑をキヨンへと向け、キヨンはけだるそうに答える。

「俺の調子は高校入学以来、狂いつぱなしさ」

再び古泉はチェスを動かし、ヒカルはノートを書く。

そんな二人を見たキヨンは一言呟いた。

「テストも近いってのに、余裕でいいことだ」

「余裕と言うほどでもないんですけどね。これは勉強の合間の頭の体操ですよ。一門解くたびに脳の血行がよくなります」

「俺はテストどころじゃない。この世界にやってきた事自体が恐ろしいってのに」

しばらく雑談をしたのち、それぞれテスト勉強に励みだした。

キヨンは英語のノートとにらめっこを開始し、しばらくするともう疲れたのかみくるの方を見る。

みくるは考える顔をしてはパツと明るくなって式を書き込み、また思索する顔になるという工程を繰り返している。

「微笑ましいな」

「あ。な、なんなんですか？わたし、何か変なことしてました？」  
ヒカルが呟いたのでそれに反応したらしいみくるが問うてくる。

キヨンは弁解しようと口を開いた、その時だ。

「やつほーいっ！」

地球最大規模の台風のような少女が現れて、ニコニコした顔で謝罪した。

「めんごめんご。遅れてごめんね」

青々と茂った笹を抱えて登場した少女をみて、ヒカルはデジャヴを感じた。

キヨンはそれを怪訝に見て

「こんなもん持ってきて何をするつもりだ。貯金箱でも作るつもりか」

「短冊を吊すに決まってるじゃないの」

ハルヒは笹を壁にもたれかけさせる。

「ホワイ、なぜ？」

あいにくキヨン以外聞く人間がいない。古泉はいつでも笑顔だし、みくるは笹を見るよりも早くお茶を用意している。

長門はひたすらに本を読み続け、アカネは呆然とそれを見ている。ヒカルは知ってる事なので別に聞かない。

半強制的にハルヒの聞き役となっているキヨンは適用なのだ。

「意味はないけど。久しぶりにやってみたくなったのよ。願いごと吊し。だって今日は七夕だもんね」

「……いつもながら本当に意味がないな」

ハルヒはやおら団長椅子に仁王立ちすると

「さあ、願い事を書きなさい」

一応ペンを構えてそれぞれに考える表情をとる。

ハルヒは椅子から飛び降りると

「ただし条件があるわ」

と継ぎ足す。

「何だ」

キヨンが問う。この流れを小説でよく知っているヒカルはいつそ全部言ってしまうと行動に出る。

微かに微笑むのを他のメンバーに向けながら

「織姫と彦星、つまりベガとアルタイルまでは願いが届くのはそれぞれ16年と25年かかるから、16年後と25年後に叶えたい願いを書け、と」

「……そっそうよ分かってるじゃない！ヒカル君凄いわ！」

ヒカルが言うだけ言って視線を戻すと、キヨンと目が合った。

キヨンのその目をみながらヒカルがさらに一言。

「……嫉妬か？」

キヨンは急に顔を真っ赤にして

「違う！」

と怒鳴る。それを古泉がニヤニヤしながら見ており、アカネも気が付いたようだ。

ヒカルにそつと顔を近づけてくると

「キヨン君って、涼宮さんが好きなの？」

と、疑問を出す。ヒカルは首を横に振る、これは違うという意味ではなく、分からないという意味合いだ。

そんな話を話している間にハルヒは全員に二枚ずつ短冊を渡す。

「さ、みんな。願い事を書きなさい！」

それぞれにペンを構える。願い事といえば全員のを簡単に思い出すヒカル。

それと被らないようにと書き出す。

「さて、悩めますね」

古泉が呟いた。

それぞれの願い事を並べて見る。

まず涼宮ハルヒだ。

『世界があたしを中心に回るようにせよ』『地球の自転を逆回転にして欲しい』

なんというか、ハルヒらしいとヒカルは思う。

次にみくるだ。丸っこい字で書かれている。

『お裁縫がうまくなりますように』『お料理が上手になりますように』

けれどみくるが未来に帰りたくないというに願いを持っていることも、小説で語られている通りでヒカルは分かっている。

次は長門。綺麗な明朝体が踊っている。

『調和』『変革』

味気がないというより、まだ言葉を覚えてないような心地である。

そして古泉。意外と乱暴な字だ。

『世界平和』『家内安全』

これはどうなのだろうか、無理にキャラクターを意識してイメージだけで書いたようにも見える。

さらにキヨンを確認。こっちは普通に

『金くれ』『犬を洗えそうな庭付きの戸建てをよこせ』

と書かれている。夢のない願いだなあ……。

アカネを確認する。丁寧な字で書かれたそれは

『幸せな家庭を持てますように』『長生きできますように』

まあ定番な事だった。彼女らしいと言えばそうなのかもしれない。やはり双子か、ヒカルも

『将来に不満無きよう願う』『短命で無きよう願う』

と、書いてることはさほど変わらなかった。

「みんな覚えておくのよ。今から十六年後が最初のポイントよ。誰の願いを彦星が叶えてくれるか勝負よ！」

ハルヒはそういうと物思いにふけるように空を見上げた。

そして静かに呟く。

「……十六年か。長いなあ」

静か過ぎる涼宮ハルヒ。短冊になにやら書き込んでキョンに渡すみくる。受け取るキョン。

ひたすらに本を読む長門、一人チェスに励む古泉、ノートを開いて勉強するアカネ。

そして今日のこれからについて考えるヒカル。

「今日はこれで帰るわ」

鞆を持って出て行くハルヒ、ヒカルはその顔をみて無性に心配になったが、走る前に他のメンバーを確認。

古泉も立ち上がると

「では僕もこれでおいとましましょう」

と言つて出て行く、去り際にヒカルに任せてくださいと告げたので、ハルヒを追うのだろう。

キョンとみくるの前に長門が不意に現れ、手に持つ短冊を「これ」と渡して帰っていく。

アカネも立ち上がって帰ろうとするが、みくるが止めた。

「待つて」

ヒカルはこのイベントに自分が参加のか疑問に思いつつ立ち止まる。アカネも同様。

「あ、あのう。一緒に行つて欲しいところがあるの」

「いいでしょう。どこに行くんですか？」

キヨンが素直に快諾した。みくるは言いにくそうに

「その……ええと……三年前に、です」

その言葉に顔をしかめるキヨン。しばらく考える動作をする。

やがて質問。

「三年前？そこに行く？ってことは、つまるところタイムトラベルですか？」

「そう　そう、です」

質問の言い合いになりそうだったので、ヒカルが横から口を出す。

「黙って行つてやれよ。……俺たちもなんだな？」

みくるが頷き、椅子に座らされた俺達の後ろに回る。

目眩を引き起こす気配がして、『跳んだ』。

椅子に座っている感覚はあるがなんだか妙な感じがする。ヒカルはそう思った。

パイプ椅子とは座り心地の違うその椅子、自らが靴を履いているという事実が伝わってくる。

そして肩に乗るほのかな重み。それがアカネの頭だと気づく。

「これは……」

「無事到着しました。三年前の七月七日です」

目の前にある別の公園用ベンチで座るみると、膝枕状態で寝ているキヨンを確認する。

静か過ぎるほど静かだった。ヒカルは実質意識があるのが二人だけという事実を利用して話し始める。

「朝比奈さん。俺が知っているこの日は二人だけの時間遡行で、俺達は関係なかったはずですよ」

みくるはそつと微笑んでから

「大きな時間振動がつい先日、今から考えて三年後に起きました」  
「それはどういう、」

「あなた方を、涼宮さんの無意識が呼び寄せたという事だと思います」

ヒカルは考える。彼女のいう真実をよく考える。

異世界人が出てくるような気配は原作に既に存在していた。文化祭直前に現れた者、二年になった直後の者。

そして結論が導き出される。

「それはつまり、俺たちが涼宮ハルヒの『間違』だったのではないんですか？」

「っ……」

みくるは口を開くが、何の音も出ずに閉じられる。

「禁則事項です」

二人の間の静寂。しばらくした後、キョンが目覚め、アカネも目を開いた。

一応頭を起こして周りを見回したキョンは言う。

「今はいつです？」

「出発点から三年前の、七月七日です。夜の九時頃かな」

「マジですか？」

「マジです」

ふとみくるは瞳を閉じて、そのまま寝息を立て始めた。

キョンの肩の上に頭を乗せて眠り続けるみくるを見ながら、ヒカルは目を回りに向ける。

「いるんだろ、朝比奈さんの異時間同位体」

その声に反応してか否か、キョンたちの後ろの草むらからみくる

(大) が現れた。

「あ。キョンくん、異世界人さん達、こんばんは」

みくる(大)はみくる(小)の頬をつついて微笑み、簡単な雑談を交える。

しばらくすると彼女はキョンにみくる(小)を背中に抱えて線路沿いに中学校へ向かうように告げる。

異世界人である二人、アカネとヒカルは此処に残るようにと告げ



る。

「時間です。さよならキョンくん。またね」

ヒカルとアカネは彼女の後ろを歩きはじめる。

このあと『消失』へと話が繋がる事を知っているヒカルは内心焦る。

「早く話を済ませないと、キョンが来ますよ?」

アカネは「え?」と疑問視するが、みくる(大)は微笑むだけ。

「歩きながら話しましょう」

「俺たちに何の用ですか?」

「我々は二人を歓迎できないから」

彼女の声は神妙なものだった。

まるで目の前でさつ害予告をされてるみたいだとヒカルは感じる。

「歓迎できないと言うのは……俺たちが未来と合致しない?」

「よくご存知ですね。そうです、過去のわたしはあなた達を知らないの」

アカネは疑問をそのまま口に出す。

「けど私達は此处に確かにいます」

「……あなたは異世界での記憶はないと聞いていたけど、鋭い勘ね」  
みくる(大)はヒカルとアカネの顔をしっかりと見据える。

「あなた方は悪い人ではなさそう……。いえ、良い人たちのようです」

彼女の優しい目が二人を見つめる。

ヒカルとアカネ、イレギュラーである二人を受け止める決心をしたみくる(大)。

自らのいる未来よりも、今の自分が生きる世界を優先したみくる(大)。

そんな彼女の言葉が、静かに別れを告げる。

二人の後ろに回ってゆつくりと告げていく。

「今のみくるをよろしくおねがいします。これから二人には困難がやってくるかもしれないけれど……」

さようなら、と後付して二人の体は時空を超えていく。

二人が地面の感触を感じて周りを見る。学校前で今は夕方。どうやら時間を飛んだすぐ後に戻ってきたらしい。

二人は部屋に鞆を取りに向かい、そのまま帰宅路を進む。時間を越えたという実感はあまり沸かないが、自分たちのために用意された家へと帰っていく。

「アカネ、夜にもう一度出て行けないか？」

「あつうん……いいけど」

生返事を交わして、そのまま歩き続ける。

ヒカルとアカネが二人でマンションの前に着いた。

エレベーターから人影を二人確認する。

ヒカルが目配せして、アカネも頷いて二人の前に向かう。

「よっす」

軽めの挨拶を告げるヒカル。

二人の姿を目を丸くしてみつめるみくる。当然だ、彼女だけは過去に置いてきたと思っているに違いないから。

「どっどっやって戻ってきたんですか！？どうして……」

「どう説明するかな……」

未来のあなたに連れ帰らせてもらいました、とは言えないだろう。

「禁則事項、かな？」

夜空の下でさらにみくるは目を丸くする結果となったが。

何の問題もないのだろう、ヒカルは納得する事にする。

「朝比奈さん、俺が過去に行くことに何の意味があったんですか？」  
キョンが言い出した。みくるは答えようがないと言った表情になる。

アカネも興味津々と言った感じで聞いている。それは何処か『無

理にこの次元に慣れようとしているよう』だった。

「ごめんなさい。わたし、その……実は、ええと……よく解っていないんです……。わたしはその、下っ端……いえ、末端……いえ、その研修生のようなもので……」

「その割にはハルヒの近くにいるようですが」

「だって、涼宮さんに捕まってしまうなんて、考えてもみなかったもの」

彼女は拗ねたように言い、そのまま黙り込んだ。

やはりその事も悩んでいるんじゃないのか、とヒカルは言わなかった。

「そうですか」

キヨンの呟きだけが、静かに響いた。

翌日、7月8日。

ヒカルはアカネとともに学校に到着すると、長門に話しかけることになる。

と言っても離す事があったのはヒカルだけだ。

「なあ長門」

「何？」

無言を極めたような声が返ってきた。

「結局のところ、涼宮はどういう存在なんだ？お前達や古泉、朝比奈さんに関係があるのはわかるんだが」

長門はしばらくの間無言を貫いていたが、おもむろに口を開く。

その言葉は冷静なフリをしていたヒカルにとって朗報だった。

「涼宮ハルヒが満足したとき、あなた達は時空を戻る権利を有する」  
「！それって、あいつが全てなし終えたときに俺達は元の世界に戻れるって事か？」

長門は頷く。

アカネはそんな会話を聞きながら、自分が本当に戻るべきか考え

ていた。

何せ、記憶がないのだ。その、元の世界とやらに戻れたところで自分にとって幸せとは思えない。

やはり彼女は過去の記憶がない分まで『無理にこの次元に慣れようとしている』に違いなかった。

「涼宮さんが不思議な能力を持つてるけど自覚してなくて、みくるさんが未来人、有希さんが宇宙人で、一樹君が超能力者」

そんな世界があるはずがない。

彼女の中にある常識の部分がそんな世界を否定しているのもまた事実だ。

やがてチャイムはなり、そのまま会話は終了したが。

元の世界を知らない彼女にとって。

これからどうなるのかは何も想像できなかった。

彼らの心のすれ違いが後の問題となることなど。

まだ知る由もなかったのだが。

SOS団部室。涼宮ハルヒと朝比奈みくる以外のメンバーが集まっていた。

ハルヒは一応「笹っ葉、片づけといて。もう用無しだから」と言いに来ていた。

みくるの方は一切不明なのだが、何心配する事はないであろうとヒカルは考える。

それが規定事項であり、明日以降は学校に来るであろう事を知っているからだ。

長門は今現在も本を読み進めている。アカネはこの空間に馴染めていないのかウロウロと部室を歩いていた。

チェスをキヨンに無理やりにも教えた古泉は二人で現在もゲーム中だ。

それを以外にも長門は興味ありげに見つめていた。

「なあ、長門。俺には全然解らないんだが、朝比奈さんはちゃんと未来人なんだよな？」

長門は首を少し傾げて

「そう」

と返答する。

「それにしても、過去に行ったり未来に帰ったりするプロセスにツジツマが合っていないような気がするんだが……」

アカネはボーツとその会話を眺める。本当に馴染めない状態なのだろう。

ヒカルも原作でまだ未来と過去のツジツマは証明されていないのどうなるのか知らない。

「無矛盾な公理的集合論は自己そのものの無矛盾性を証明することができないから」

難しい事を淡々と述べた長門は、キヨンの方を見据えると

「そのうち解る」

と言って自分の席に戻った。

「こういうことですよ。今、僕のキングはあなたのルークによって王手をかけられています。困ったなあ、どこに逃げましょう」

古泉はキングを手にとるとそのまま自分のポケットにしまった。

「さあ、この僕の行動のどこに矛盾があつたでしょうか」

キヨンが苦い顔をする。意味不明なたとえに付き合う気もなさそうだ。

「とにかく。ハルヒが矛盾の塊であるのは間違いなさそうだ。そしてこの世界もな」

「もっとも我々の場合、キングに対しした値打ちはないのですよ。より重要性があるのは、あくまでクイーンなのでね」

キヨンがクイーンを倒せる配置を発見、黒のキングの消えた場所に白のルークを置いた。

世界は平穏に流れている。それはこの時代の後半から始まる不思議のオンパレードを溜め込んでいるようだった。

「……次に何が起きるのかは知らんが、もつと頭を使わなさそうなことが起きて欲しいもんだな」

アカネはその言葉に不安。

「キヨン君は頭さえ使わなければ何が来ても大丈夫なの？」

継ぎ足すように古泉。

「無事平穩が一番だと思いますが、あなたは何か起きたほうがいいのですか？」

キヨンは無視し、自分の勝敗欄に 一つ書き込んだ。

「これで『笹の葉ラプソディ』も終わりか」

長門を除く全員がヒカルの方を向いた。

「なんだ、それ？」

キヨンが疑問。ヒカルは笑いながら

「原作でのこの七夕の話の題名だ」

と告げてそのまま欠伸を一つ。

これはこの世界の人を知るべき物ではないのをヒカルは知っているのだ。

ならば深く追求しないのが筋であろう。

七夕が過ぎて、期末テストの時期が近づいてくる。

彼女の小さな不安が、ゆっくりと流れ出す期末テストの時期が。

涼宮ハルヒの間違　ガールズトーク編へ続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3917c/>

---

涼宮ハルヒ二次創作「涼宮ハルヒの間違」

2010年10月9日05時44分発行